

中国内陸農村訪問調査報告 (8)

内山雅生・祁 建民

The Report of House-to-House Investigation in Rural Community of Inland China (8)

Masao UCHIYAMA and Jianmin QI

概要

本稿は、2016年9月に筆者をはじめとする中国農村研究者が中国雲南省C州D村及び山西省L県J村、G村と「四社五村」で実施した聞き取り調査の報告書の一部である。老農民・幹部経験者・村落婦人・農村教師など農村の諸階層から聞き取り調査を行い、1940年前後を起点とする70余年間の農村社会経済変革の歴史的過程を追跡した。その際に、農民との質問応答録を原則としてそのまま収録することによって、村落社会経済の多様な面に注目し、村民の視点に立った家族社会史・村落経済史の再構成を目指した。

キーワード：中国内陸農村、個人史、家族関係

2016年9月に、筆者をはじめとする中国農村研究者は、中国雲南省C州D村で聞き取り調査を実施した。また、山西省L県J村、G村と「四社五村」と呼ばれる地域の民間生活用水組織及び地方政府の水利行政機関を訪問した。四社五村の水利組織は明代から開始されたといわれ、1950～70年代の集団化を経て、今もその生活用水（湧き水）の水権をめぐって、国家水利機関の管理・介入に抗して、自立的な運用を保っている。なお、以上の訪問調査は、河北大学華北研究センターと山西大学中国社会史研究センターの協力を得て、日中両国の共同研究として実施した。本稿でも『中国内陸農村訪問調査報告 (7)』と同様に、プライバシーの保護に配慮して村民の実名の表記は極力避けるようにした。

このプロジェクトは、2013年より5年間の予定で開始された、平成25年度基盤研究 (B) (海外学術調査)「華北農村訪問調査による近現代中国農村社会経済史像の再構築」(研究代表者 弁納才一・金沢大学教授)及び2015年より5年間の予定で開始された、平成27年度基盤研究 (B) (海外学術調査)「個の自立と新たな凝集力の中で変貌する現代華北農村社会システムに関する史的研究」(研究代表者 内山雅生・宇都宮大学名誉教授)によって実施している。

一、山西省四社五村

1、王 宝虎

被訪問者：王 宝虎（義旺社会首、霍州市水利局副局長張愛国が同席）

場所：王宝虎宅

日時：2016年9月17日午前

・今年の小祭と大祭は仇池社が主催した。費用は合わせて1万1千円で、主に幹線水路のパイプを修繕した。演劇を演じなかった、映画も上映しなかった。小祭の会食は60～70人が参加し、大祭には70～80人が参加した。現在参加する幹部は多くなった。付属村の幹部は以前は参加したが、その後一時参加しなかった。しかし、現在付属村の幹部は皆参加する。それは皆暇もあるからだ。今年行事の費用分担は、私（王）が5000元、蘭李庄3000元、義旺村1000元、杏溝村2000元だ。工事の範囲は山峪から分水亭までの水路だ。まず皆龍王廟に参り、兄弟の順に祭祀した。豚の頭を捧げ、爆竹を鳴らした。現在義旺村の水日は4日、仇池社は8日だ。楊二娃が杏溝村の6日の水日を買わず、蘭李庄の7日の水日しか買わない。楊は買った水で、クルミの苗木を灌漑している。苗木は未だ出荷しないので、収益をあげていない。

・楊は昨年二つの村の水を買い、6000～7000元を払った。今年は蘭李庄村の水のみ買い、2000元を払う。

・義旺村の村長は続いて朱兵兵だ。彼は年間村の水道料金を3000～5000元を払った。このくらの金では足りないが、私はあまり気にしない。現在、リンゴ園の灌漑は1時間に50元を取る。

・琵琶園村と白木溝村では皆井戸があるようになったので、義旺社の水が要らない。分水亭は義旺村のみ給水する。分水亭は殆ど四社五村の水を使用し、足りない時のみに山の上にある機井の水によって補給する。

・リンゴの保存用冷蔵庫の建設は断念した。収益があまりないと予想する。昨年、リンゴは1斤に2.5元で出荷した。村の四分の一の耕地は野菜を栽培している。リンゴを栽培する農家は90戸くらいだ。

・現在、杏溝村、孔澗と劉家庄村だけ機井がない。国家より出資し井戸を掘るのは難しく、村も資金がない。

・仇池社は洪洞県の野菜栽培の試験的な村なので、主にトマトと長ネギを栽培する。

・私は相変わらずよく仇池社に行く。仲が良いのだ。

・義旺村は来年道路を修繕する予定だ。リンゴの運輸のためだ。

・現在の食糧価格は、小麦1.2元、トウモロコシ0.8元だ。

・家畜の養殖では、蘭李庄がメンヨウ（羊）を飼う。義旺村3、4軒が養豚しており、一軒で70～80頭を飼う。しかし、近年豚肉の価格は下がった。

・機井を掘るには初めの予算が40万円で、その後50万円を超えたので、省の承認が必要だ。結局73万円だった。水利局と仲が良いので、それ以外の方は私が立て替え払いをした。合わせて110万円だ。

・近年、移民が来た、商売をした。もう一つの理由はこの村の小学校が良いので、移民が子供をこの小学校に入学させたがった。

・近年大祭では演劇を演じなかった。初め長男にあたる仇池社が演じなかった。その以後、各社も演じなくなった。

2、張愛国

被訪問者：張 愛国（霍州市水利局副局長）

場所：王宝虎宅

日時：2016年9月17日午前

・現在各村には用水戸協会が設立されるが、この辺りは四社五村があるので、この協会の設立が必要はない。四社五村が自らで管理する。

・高速道路のサービスエリアは今年井戸の掘ることを水利局によって承認された。それ以後、四社五村の水を使用しない。

・この前、飲用水プロジェクトを実施した際に、四社五村の事情が複雑なので、給水ステーションは王さんに請負をさせた。

・霍州の飲用水プロジェクトはほぼ完成した。次は灌漑プロジェクトを実施する。給水パイプを各田圃までに入る。すべて国家投資だ。山西省は2000年から飲用水プロジェクトを実施し始めた。国家のプロジェクトの実施期間より2年前に実施した。国家の経費を利用して、もう一回整えた。

・霍州の汾河の整備プロジェクトは資金不足で、今一時中止している。

・現在、四社五村の中に三つの村だけ井戸がないが、彼らにとっては水利局への要求はそんなに待ちきれないほど差し迫っていない。国家の井戸掘りの基準にも満たない。霍州の西北地域に井戸掘りをするには、水利局の承認が必要だ。

・民間の井戸掘り業者は60～70メートルまで掘ることができる。義旺村の井戸は運城の業者が掘った。

3、郝継紅

被訪問者：郝 継紅（義旺社元会首）

場所：王宝虎宅

日時：2016年9月17日午前

・水冊は今も大事に保存している。

・カトリックの信仰は信教が自由だ。

・村民の用水のために、各家に貯水池がある。私の家の貯水池は20立方メートルだ。村はあまり変わらない。人口は少し増えたが、そんなに多くない。

・リンゴを収穫する際に、村の人手は足りないため、外から雇う。給料は一日に数十元だ。

・四社五村の無形文化財の申請は省の承認を得た。

・霍州市テレビ局の喬毅さんがよく四社五村で取材し、撮影した。作ったコンテンツは何かの賞に入った。

・現在、小祭と大祭に参加する人が増えた。昔、参加者はすべて主社村の者で、付属村の人は一時参加しなかった。現在では皆が参加する。

4、橋東村の李村長、馬副村長

場所：橋東村

日時：2016年9月17日午後

・今年の小祭と大祭はわが仇池社で開催した。仇池社は水路の修繕費用を負担しないが、小祭と大祭の費用を支払う。今年は経費の節約のために、演劇を演じなかった。政府もこのように提唱する。

- ・今年の小祭と大祭は橋東村内のある小さい食堂で行われた。
- ・橋東村と橋西村の幹部はよく交流する。わが仇池社は長男だ。
- ・四つの機井はすべて個人によって請負をした。彼らは村に請負の費用を納める。
- ・この村は2009年に初めて井戸を掘った。2010年は更に三つの井戸を掘った。井戸水があるので、トマト、長ネギを栽培できるようになった。
- ・わが村は野菜栽培の基地になった。今年の年末まで土橋の谷を埋めて、農貿交易市場を建設予定だ。
- ・昔、幹部は野菜販売のブローカーを担当したが、現在専門のブローカーがやるようになった。
- ・トマトの栽培面積は昔より拡大した。小麦も栽培し、食糧は自給できる。
- ・農業の灌漑には、電気料金が1キロワットに0.36元、家庭用料金は1キロワットに0.4元で、農業用電気料金はすこし安い。
- ・わが村は現在四社五村の水を利用しない。2009年以降、霍州から洪洞までの水路が無くなった。しかし、またその水権は放棄していない。
- ・旧廟の再建について、現在計画を立てていない。

5、喬 毅（霍州市テレビ局ネットテレビ責任者）

被訪問者：喬毅（霍州市テレビ局ネットテレビ責任者）

場所：喬毅宅

日時：2016年9月17日午後

・2010年から毎年四社五村の小祭と大祭を撮影する。四社五村に関するコンテンツは第9回民俗撮影協会の貢献賞を受賞した。

- ・現在四社五村は省の無形文化財で、霍州の威風鑼鼓も無形文化財だ。
- ・四社五村の社爺樹の樹齢はもう数百年以上で、初めに五つの株だったが、その後一つに絡んだ。しかしまた五つの枝に分裂している。これが神の木だ。

二、雲南省楚雄市子午鎮多宝村

聶 進榮

被訪問者：聶 進榮（楚雄市子午鎮多宝村村民）

訪問場所：聶進榮宅

訪問日時：9月10日午後

- ・34歳、未婚。
- ・先祖は四川省から移民してきた。父母と3人家族。
- ・父聶開雲、63歳。母姚光珍、60歳。共に本村人。父の友達の紹介婚。父は鎮の人民公社のトラクター運転手をして月10数元の収入があった。
- ・私は中学卒業後、広州・深圳・昆明に出稼ぎに友達で紹介で出かけた。だいたい2年契約で、

技術を身につけたらスキル・アップの為他の場所に移った。この村では、行政の紹介で出稼ぎに行く者もいるが、私の場合は全て友達の紹介。さらに就職先の人に他の場所を紹介されることもある。この村の人に紹介されるとは限らない。

- ・この村には200世帯の家族がいる。聶姓は20世帯、姚姓が50-60世帯いる。いずれも漢族。

- ・我が家の所有地は3畝、耕作地は出稼ぎ者の土地も併せて5-6畝。そのうち稲作が1畝、タバコ栽培が4畝。その他トウモロコシを生産している。

- ・一年二期作。9-10月に大麦やソラマメを植え付け、4月に収穫する。

- ・私はここから200キロ離れた磨沙で道路工事の出稼ぎに従事していた。現在は父母の手伝いをしている。農業収入は2-3万元。出稼ぎで月3,000元の収入。タバコの生産が終了したら、高速道路工事の出稼ぎに行く。以前広州や深圳での出稼ぎでは月4,000元の収入があったが、近年では3,000元に低下している。村外での出稼ぎのほうが楽だ。村にいるのは年寄りと子どもばかりだ。

- ・タバコの生産には国から補助金が支給され、生産されたタバコは集荷所に集められる。ここでは2, 30人が働いている。管理の2, 3人を除くと村人。給与は高くない。鎮には2, 3ヶ所のタバコ集荷所がある。

- ・村には多宝太廟がある。1982年に建設された。

- ・父親は貧農だった。かつてこの村には姚という地主がいた。人民公社時代には、生産大隊が4つあった。

- ・平地の同族は互いに助け合っているが、山地の人たちは水や土地をめぐる争いが絶えなかった。

- ・昔はこの村では井戸水を利用していた。4メートルぐらいの深さだった。現在では各家に水道が施設されている。

三、山西省晋中市靈石県椒仲村

1、蔡 兆鎖

被訪問者：蔡 兆鎖（椒仲村前書記長）

訪問場所：椒仲村村民委員会

訪問日時：9月16日午前

- ・66歳、丑年。78年に黨員となり、79年から39年間党書記を担当。

- ・村の人口は600人、200世帯だ。村はもともとここから北の山の近くにあった。改革開放前は貧しい村だった。交通の便も悪く、飲料水にも事欠いた。1畝当たり300斤しか収穫できず、食糧が不足していた。

- ・改革開放後、産業構造の改善が図られた。食糧生産から、果樹栽培に転換した。1978年から1,200畝の果樹園をつくった。平均耕作面積は、一人当たり2畝。リンゴ、ナシ、クルミなどを生産し、生活は豊かになった。食糧も増大し、700斤となった。

- ・村の集団経済も発展し、90年代には石炭工場も作った。省の模範村となり、96年には全国の模範村、98年には山西省の労働模範、91-99年の山西省の林業の模範、2011年には全国の労働模範となり、山西省の20の優秀村の一つでもある。

- ・村民一人当たりの年間収入は、2010年で1万元を超えたが、石炭の景気が悪化し、この2, 3年は8,000元となっている。

- ・2010年以降は都市と農村の一体化が進み、生活も都市化してきた。
- ・昔の村の土地1,300畝は、林業建設会社の土地となり、毎年収入を村民に分配している。
- ・2008年に今の土地に移転し、経営は会社、所有は村民とした。農民はもう食糧生産をしない。町の第三次産業に従事している。ガス・水道も設備され、生活レベル1に達している。一部の年長者はクルミの栽培をしている。運輸業に従事する者が多い。
- ・生活区域は、寧沢社区となり、居民委員会ができた。戸籍はまだ農民戸籍なので、県で検討中だが、管理上は淑仲村のままだ。
- ・現在村民が居住する建物は、6階は、エレベータがなく、日差しが強いので、960元。1階は1,200元。2階は1,380元。3—5階は1,420元。
- ・現在では都市と農村の差別を少なくしている。
- ・林業会社の職員は、26人、うち6人が技術者。男性を80円で、女性を60円で雇い、クルミを採取している。老人たちも参加しているが、退職金はない。
- ・80歳以上の老人には、養老保険から月130元を保障している。60歳以上の村民には、医療保証金を村から支給している。
- ・昔の村の炭鉱は、省の炭鉱局に統合され、汾西公務局に所属し、村は一部の株を保有している。毎年県から3,000元の補助を受けている。最初は良い成果を出したが、現在は下降気味だ。集団経営のほうが良い。初めから鄧小平の政策には反対。農業大国であったのに、農業が軽視された時期だ。土地は集団化したほうが良い。

2、馬 全保

被訪問者：馬 全保（淑仲村村民）

訪問場所：淑仲村村民委員会

訪問日時：9月16日午後

- ・83歳、戊年。
- ・妻は耿家庄の出身だが、10年前に亡くなった。
- ・長男は48歳、介休市で運輸業。長女は介休に婚家。次女も同じ。三女は本村に居住。次男は村の炭鉱に勤務。四女は静升鎮に居住。
- ・小学校に4年間通学した後、村で農作業に従事した。
- ・解放前は、畑仕事の他に短工もした。土地改革の時は、下層中農。互助組の組長となった。互助組は、7、8世帯、仲の良いもの同士が結成した。別に隣家同士ではない。ばらばらだ。
- ・互助組結成前も、急ぐときはその家の仕事を優先して、協力し合った。
- ・私が組長となった原因は、文字が読め、毎日の出勤状況を記録できるからだ。
- ・日中戦争中に、日本軍と傀儡軍が来たことがある。二人の村人が銃殺された。日本軍はこの村にトーチカを作った。夜は八路軍が来てゲリラ戦となった。村の中では、民兵が八路軍に協力した。民兵は村民の十数人で結成され、地下活動をしていた。蔡尽丁がいた。山の八路軍の根拠地に行った。帰村して村の主任となった。蔡貴活は隊長になった。大廟は、トーチカ建設の為に壊された。村の西と南の入り口に二つの小廟があった。共に五道廟だったが、高級合作社の時に壊した。廟では菩薩を祭っていた。
- ・この村で土地を持っている人のところに短工に出かけた。給料はなく、トウモロコシを1日20斤もらった。短工市はなかった。短工は特に紹介は必要なかった。労働力を必要とする家が自分たちで探した。同族の人が探した。村は大きくないので、各家の労働状況は皆わかっている。

労働力が足りない家は、長工を雇っていることが多い。

・互助組だ。成立した後の2年後に初級合作社ができた。23世帯が参加した。1, 2年後に高級合作社となった。村人全員が参加した。参加したくない家が1, 2世帯いたが、仕方なく参加していた。

・大躍進の時は、主任だった。村人の3, 40人が製鉄工場で働いた。深耕もした。村から民工がダム建設に参加した。山の上に植林もした。村の中に大きな穴を掘り、貯水池を作った。村外に深さ3丈の二つの井戸を掘った。

・大躍進時には、この村でも上部機関への虚報があった。多めに報告したので、多く納めなければならなかった。

・困難期には、食糧不足だったが、村の裏側に天然の野菜畑があった。飢餓者はあまり出なかった。一人一日1斤とされ、12歳以上は大人の労働力として扱われた。

・四清運動時は県から2人の工作隊が派遣されてきた。村民大会は開かず、幹部と会計を審査した。幹部が替わったかどうかは不明。

・文革中にこの村には、二つの派閥があった。一つ目は「兵团」で紅衛兵だった。二つ目は「東方紅」だ。県城で武闘をした。村では書記や主任が失脚した。

・キリスト教徒は昔はいなかった。近年何世帯かの信者が礼拝をしている。

・この村の三分の二は蔡姓。元々と兄弟二人だったが、祠堂がある大蔡と小蔡に分かれた。残りの三分の一は馬姓。一つの祠堂がある。居住地域は皆ばらばらで、生産隊にも関係していない。

四、山西省晋中市靈石県溝峪灘村

李 治中

被訪問者：李 治中（元小学校教員）

訪問場所：溝峪灘村村民委員会

訪問日時：9月18日午前

・1932年生まれ、申年。

・父は李銘堂、母は張達香連、ここから15キロ離れた沙腰村の出身。

・妻は赴妙香、董家伶村出身、亡くなった。

・長男英宝は、南関鎮副鎮長、57歳。次男李旺宝は、2004年に自転車での交通事故で死亡。三男李建宝は、酉年、道美村に居住。四男李根宝は鼠年、靈石城内に居住。長女李銀芳は元県の統計局を定年。63歳。

・私はこの村の私塾に3年間通学。傅灘の日本人小学校に1年通学。日本語を習った。「1, 2, 3…」「左、右」「前向け」等を喋れる。その後靈石県の高等小学校に入り2年後、介休の師範学校に3年間通学。

・師範学校を卒業後、平遙県火柴工場小学校に5年半勤務。靈石県内の小学校に転勤、3年間勤務。その後且且伶小学校長を2年間、静升小学校校長を2年間、扞鎮聯合小学校校長を5年間、夏門聯合小学校校長を13年間、その後1993年の定年まで、南関中心小学校校長を勤務。

・靈石県の小学校に勤務中に、党员となる。党员は青年団団員当時に希望し、二人の紹介人により許可された。二人のうち一人は勤務先の校長。もう一人は郷の幹部。

・土地改革時は中農。4, 5畝が水田、6, 7畝が乾田。富農は李玉祖だけで10畝所有。富裕中農も李凱元1所帯のみ。

・戦争中、日本軍は鉄道に沿って炭鉱にやって来た。山の上にトーチカを建設した。炭鉱の裏の山の上にもトーチカを建てた。川の上に簡便橋を作った。木材で作った橋だ。

・日本軍は小学校も作った。天津から中国人の教師男女2人がきた。日本語は少ししか話さず、多くは中国語だった。小学校の児童は、1クラス6-7人、併せて30-40人だった。

・介休の師範学校を卒業後すぐに教師となった。教員免許はなかった。勤務先の小学校では私一人が教師だった。国語・算数・体育・音楽を担当した。やがてもう一人の教師が派遣されて来た。教材は統一した。子どもたちとの仲は良かった。

・政治運動が起きても、小学生は参加しない。三反五反運動時は、教師が集められ、上からの指示に従った。文革時は校長だったので、大字報で走資派として、他の教員から批判された。文革の後も校長を続けた。

・小学校は一つのキャンパスではなかった。それぞれの村に数人から十数人の教員がいた。若い教員が多かった。校長の私は各村を回った。

・文革時の紅衛兵には若い教員も参加した。二つの派閥があった。一つの派閥は私を批判した。もう一つの派閥は私を支持した。派閥の名前は忘れた。それぞれ上部組織があった。文革が終了すると、元紅衛兵であった若手の教員を数人抜擢した。文革は政治運動だったので、あまり気にしない。

・改革開放後は学校教育では、教育の質を重視するようになった。進学率を高めるように県からも指導された。

・1993年に帰村すると、村には石炭の精錬工場と石灰の工場ができた。旧来の幹部は十数年間変化しなかったが、新幹部となって2年間で新建設が進行している。この村には石炭がないので、村外で精錬し運送している。

・この村は土地は少ないが、幹線道路に面しているで、食堂の収入の一部を村に納入している。毎年年末に村民に小麦粉を3-5袋配給している。1袋は50斤。一人当たりサラダ油を5-10斤支給している。購入する必要がない。中秋節には村民に月餅1斤、はちみつを1本、年間にコメを10斤支給している。

・将来は集団化するかもしれない。集団化、請負制、いずれにしても幹部がポイントだ。集団は大きくても小さくてもだめだ。

・共産党の党員は20人だが、書記を選出するときは、十数人の村民代表の意見を参考にする。南関鎮の党委員会の幹部が、それぞれの地域の立候補者から選出する。

・村長の選出に当たっては、鎮の幹部が来村し、党幹部と相談し、第一期立候補者を公表する。次に第二期立候補者を絞って村民会議で投票する。上部からの指導が大半だ。

・老幹部として思うことは、病院を建てること。川の反対側に診療所があるが、薬の備蓄や診察能力が低い。村人は霊石まで通院することが多い。村長から、県には来年あたり病院建設の計画があると聞いた。

・昔は天主教徒がいたが、近年ではキリスト教徒が数人いる。南関鎮に教会がある。